

2024年3月24日

「主に依り頼む人は、シオンの山」

詩編 125:1-5

松井直樹神学生

詩編 125 編は、白山教会の礼拝の中の交読詩編でも時々読まれている。

しかしこの詩編の特長は2つあり、第1は、【都に上る歌】とあるように巡礼用の詩編として別に 120 から 134 編は使われていたことである。第2は、この詩編と 126 編とはいわゆる「シオン信仰」の歌であることである。つまりバビロン捕囚期のイザヤ書によく出てくる捕囚からシオンへの帰還への大変な喜びが表現されていることである。従って1節の「シオンの山」は聖書では最も高い山、一番高い山としてここでは表現されており、天と地を結ぶ聖なる場所として存在するということであり、国と国とを裁く平和の神の存在が示されている。最後の「イスラエルの上に平和がありますように。」という点も、人々が一定の距離を保って何かを敬うものではなく、悔い改めの行動を伴うものである。

そして同じ時代に書かれたイザヤ書 51 章には「シオンへの帰還」とあり、次の 52 章においてイエス・キリストを思わせる「苦難の僕」という順番になっている。

そして新約のルカ 18 章 31 節は、主イエスによる 12 人の弟子に対しての「都上り」の宣言である。このように詩編 125 編もイザヤ書 51 章の「シオンへの帰還」も、共に主イエスの「都上り」をも思わせる内容なのである。つまりこれらの一連の文章の構造は、旧約も新約も同じ「都上り」の順番となっている。

今は、受難週の時期で都上りをされる主の苦難を覚える時期でもある。受難のこの時、主に示された神様の大きな愛をまた覚えたいと思う。私たちもまた主イエスの都上りを思わせるこの詩編 125 編の巡礼の歌を歌いながら、それぞれのこれから新しい環境に向かって共に前へ進んで行ければと思う。